

1 仙台空港の民営化により東北経済の活性化を目指す 官民連携による「創貨」事業・交流人口の拡大

宮城県 | 七十七銀行

仙台空港の民営化により、交流人口を拡大させ、東北を豊かにする。
国の管理空港初の民間委託による空港運営により、旅客数に加え貨物量の増加も期待されている。

仙台空港は、宮城県のみならず、東北全体の経済活性化の拠点としての一翼を担い、さらなる高みを目指して飛び立つ。



宮城県の概要

【人口】2,318,752人(2018年3月1日現在)

- ・東は太平洋に面し、豊かな漁場と日本三景の1つである松島をはじめとする風光明媚な観光地などに恵まれている。西には蔵王・船形・栗駒などの山々が連なり四季折々の姿を見せる。
- ・仙台平野から北上高地の南端にかけての東部は、冬も比較的暖かく、一年を通じて比較的穏やかな気候。奥羽山脈の裾野にあたる西部は、夏は厳しい暑さはないが、冬は奥羽山脈をこえる季節風の影響を受け、降雪が多い。



東北の空を、世界の空へ

2016年7月1日、仙台空港が民営化空港として新たなスタートを切った。国の管理空港としては初めての民営化である。航空需要の拡大による地域活性化、民間の知見を活かした利用者利便の向上、産業や観光の国際競争力の強化など、仙台空港への期待は大きい。

ヒトとモノの活発な交流を生み、育てることで、東北の文化・経済を世界に広げる起点となる。「東北の空を、世界の空へ」、それが民営化した空港のスローガンである。

仙台空港等活性化検討会～コンセッション方式による民営化～

民間活力による仙台空港の活性化の方向性は、宮城県が2012年にまとめた「みやぎ国際ビジネス・観光拠点化構想」に盛り込まれており、その基盤には、宮城県、国土交通省、地元経済団体や七十七銀行をはじめとする民間企業・金融機関で構成される「仙台空港等活性化検討会」での討議内容が反映されている。宮城県知事の民間活力への強い期待もあり、交流人口の拡大、地域の観光・産業の発展、物流体制の再構築といった宮城県が有する課題解決に向け、構想当初から官民のノウハウや知恵が融合されているのである。

公募の結果、仙台空港の運営権は、東急電鉄、前田建設、豊田通商など7社で構成する企業グループが獲得し、2015年11月に新しい

運営主体となる「仙台国際空港株式会社」（仙台国際空港）が設立された。

従来、別々の主体が実施していた貨物ビル・旅客ビルの管理、駐車場の運営、着陸料の設定を含む滑走路の整備管理等を、新会社に集約することで、一体的かつ機動的な経営を実現している。



新たな輸出マーケットを切り開く「創貨」事業

仙台空港の民営化と時を同じくして、仙台国際空港、七十七銀行は日本通運等と共同で「東北・食のソラみち協議会」を立ち上げた。目的は、東北と世界を「食」で結ぶこと。翌年設立した「東北・食文化輸出推進事業協同組合」には、地元銘菓や笹かまぼこのメーカーなど、宮城県のみならず東北の食品会社15社が参加し、生まれ変わった仙台空港と力を合わせ、新たな貨物を作り出す「創貨」事業で地元産品の販路開拓を目指す。

仙台国際空港の岡崎克彦取締役営業推進部長は「民営化の入札の際もそうだったが、いわゆる地元企業ではない我々がどのように地元の方々と関わるかが課題となっていた。地域の多くの企業と取引のある

七十七銀行のアドバイスは非常に重要。創貨事業の取組みについても、七十七銀行がきめ細かいネットワークを通じて参加企業を紹介してくれた。創貨事業のみならず、空港内の商業施設を拡大させたいと考えており、もちろん、そこで販売するお土産には、多くの東北の食材などを使いたい」と語る。



仙台国際空港 岡崎取締役営業推進部長

仙台空港 = 観光の玄関口 = ツーリズムの拠点

仙台空港の民営化を契機に、国内外からの観光客誘致に向けて地域が一体となったプロモーションを展開しよう。そんな機運が高まる中、2017年3月、宮城県東部の4市9町が連携して「一般社団法人 宮城インバウンドDMO」が設立された。同DMOの設立には、企画・構想段階から七十七銀行が関わっているほか、仙台国際空港もアドバイザーとして関与している。



空港内の観光案内所

※地域の関係者と共同して観光地域づくりを行う法人。
Destination Management/
Marketing Organizationの略。

「仙台空港は観光の玄関口。空港に降り立った方に、どうやって各地域の魅力を伝え、実際に観

光地に行ってもらおうか。そういったことを各自治体や地域の現状を熟知している地方銀行と協議することの意味は大きい。観光は幅広い総合産業であり、波及効果も大きい。旅客数を増やすことは、自治体や空港のみならず、地域全体の期待が集まる」（岡崎氏）



空港内に設置されているランナースポーツ

仙台空港は、観光の玄関口だけでなく、ツーリズムの拠点としての役割も志向する。空港内にランナースポーツ（シャワールーム）やサイクリングポート（自転車の組み立て場）を併設しており、海外からの旅行者が、自分自身の自転車を携行して仙台空港に降り立ち、組み立てた自転車に乗ってサイクルツーリズムを楽しむことも可能だ。

東北全体のさらなる飛躍

仙台空港は、民営化後、着陸料を柔軟に設定するなど、国内外の路線の誘致活動を積極的に展開。2017年度の仙台空港利用者は、前年比28万人増の343万人と、過去最高を更新した。

宮城県土木部 櫻井雅之部長は「どの路線を誘致するか、空港の利便性をどう高めていくか、地元産品をいかに集約して各地に運ぶか。そういったことを民間のノウハウを活用しながら進めてきた成果だと思う。全国規模の事業展開実績をもつ企業による空港運営、地域の

事情に精通した地元銀行のサポート、交流人口や創貨のさらなる拡大には官民の一層の連携が不可欠」と今後を見据える。

仙台空港の活性化には宮城県のみならず東北全体が熱い視線を送る。みんなで一緒に東北を豊かにしよう。仙台空港は東北の期待を背負い、さらなる飛躍を目指す。



宮城県土木部 櫻井部長

Data

外国人観光客が日本でやりたいことは？

「その国ならではの美味しい料理を食べたい」、「ショッピングを楽しみたい」など、海外旅行の目的は様々です。では、外国人観光客は、訪日旅行の際に何をしたいと思っているのでしょうか。

観光庁の訪日外国人消費動向調査(2017年)によると、訪日前には、日本食を食べること、ショッピング、繁華街の街歩きなど楽しみにしている方が多いようです。

それがもう一度日本に来た場合にしたいこととなると、四季を体感したい、日本の歴史・伝統文化体験、日本の日常生活を体験したいなど、「体験」をしたいと考える方が増える傾向にあります。

日本の文化や雰囲気と直接触れたい機会を多く提供することが、求められている「おもてなし」なのかもしれません。

外国人観光客の訪日旅行に関する意識

